

特集日食報告

日食に遭遇して

増田優穂（花山星空ネットワーク会員）

21 世紀に入って、日食を自分の生まれ育ち現在も住んでいるここ日本の京都の地で、梅雨のまだ明けない厚い雲間にしっかりと見ることができ、とても感動しました。その大きな理由は二つありました。

一つ目は、ワクワクしながら(天候の状況でハラハラドキドキ感もありましたが)貴重な予測された時間帯を待って、自分自身の肉眼で実際に見ることが、しかもずっと見続けることができたからです(まるで夕方か明け方の三日月をながめているように)。もちろん太陽メガネは準備して携帯はしていましたが。

様々な要因が重なってのことでしたが「生涯のなかで何てラッキーで贅沢な貴重な時空に出会え、すばらしい時を持つことができたのだらう」と思いました。後日、晴天の日の太陽を肉眼で見ようとしたときのまぶしさたるや……。2秒と見続けていられませんでした。

2009 年 7 月 22 日の午前 11 過ぎ、京都大学の理学部の建物の奥の広い中庭で三日月形の太陽をみた瞬間、そしてその後も緑の芝生のベンチに寝っころがって、梅雨の厚い雲間からときおり、そして何度も現れるのをいつまでも見ていました。

二つ目は科学と科学技術の力、先人の科学者や研究者たちまた今回の先生方の御努力と教育に感動し感謝しました。そして、自分がこの時代に生まれ今を生きていることに。なぜなら古代の人々は、突然に出くわしたこの不思議なできごと(現象)に、大変な驚愕と畏怖の感を持ったことと思われまます。電気も暖房装置もなく太陽の光と熱にすべて頼っていた人類にとって、まだ沈む頃でもないのに、中天にある太陽が欠け始め消えていったのですから。とりわけ皆既日食は一大パニックだったことでしょう。現在の天災である大地震がこうですね。当時の人々は「こんな現象がまた起こったら…。」とそれこそ百年分のロウソクを買い求めたい気持ちだったのでは……………???

太古の人類の時代、ホモサピエンス以後の有史の時代、そして、まともに正視してもいけないと言われていたというヤハウエ(神・カミ?)やイエスや天照大神・日巫女(ひみこ)等の時代は流れ、コペルニクスやガリレオなどの時代があり

☆ 日食に遭遇して ☆

ました。近代のさらには現代天文物理学の確立以前の人々は、たとえこの現象の原因、理由が解明され一応ほっと安心はしても、それを地球上で観測できる日時や場所までは、こんなに詳しくはわからなかったことでしょう。それが今や、様々な予備知識や予測情報に基づいて、大人も子供もその時間帯を【ワクワクしながら早くから待つ】ことができるようになり、太陽メガネや望遠鏡、さらには電波望遠鏡などでこんなに楽しく期待しながら三日月形やダイヤモンドリングや真昼の暗闇を楽しみながら見るできるようになったのですから…。

しみじみと人類史の中での隔世の感をかみしめております(それにしても、宇宙や銀河や星の時間を思えば、《ほんの瞬き》なのでしょうが……。めまいがしそうです)。3年後、京滋地方でも観測できると聞いている 2012 年の金環日食も、とても楽しみです。日食メガネも大事に保存しておきます。

未来を担う子供たちをはじめ地球上の人々が宇宙や大自然に目や思いを向け、夢や希望をたくせば、平和ですばらしい戦争のない 21 世紀の地球が実現できると思います。

科学と科学技術の進歩と平和利用は、いつの日か、不幸な天変地異や戦争の悲劇をも克服でき、その恐怖や不安、心配などもなくなるようになり、すばらしい大自然環境と平和な社会を存続できると思います。

様々な御教示をありがとうございます。これからもまたよろしく願います

日食こぼれ話

編集子

源平合戦のひとつ、水島の戦いは珍しく平氏が勝ちました。時は寿永二年閏十月一日(=1183年11月17日)、場所は岡山県倉敷市、今は工業地帯となっています。戦い中に日食が起ったため、それまで優位に立っていた源氏側が驚きのあまり逃げ出したという話が『源平盛衰記』巻三十三にあるそうです。平家方は予め日食のあることを知っていたが、源氏方(実は無学な木曾義仲の兵)は知らなかったのでびっくりしたのでしょうか。金環食だから真っ暗にはならなかったはずで「天俄かに曇りて日の光見えず」という表現はオーバーです。義仲は京へ逃げ帰りこの後、急速に低落していきます。

この時の金環食は山陰山陽四国で観られ、京都では部分食でも9割以上欠けたはずで